2009 年 7 月 1 日放送

印象に残る症例

東京女子医科大学　東洋医学研究所　非常勤講師　　久米　由美

漢方治療の特長のひとつとして、１つの処方で複数の、しかも西洋医学の考え方では一見、関連がないと思われる症状が改善するということがあります。今回は、「風邪をひきやすく、治りにくい」ということに加えて、不眠や抑うつ傾向という精神症状の訴えがあった患者さんが、黄耆建中湯の服用によって比較的短期間に両方の症状が改善した、という症例をご紹介したいと思います。

患者さんは 61 歳の主婦の女性です。初診時の主訴は「風邪をひきやすく、治りにくい」ということと「下痢をしやすい」そして不眠ということでした。もともと落ち込みやすい性格であり、不眠もかなり以前からあったそうですが、ここ数年、義母が亡くなったり、息子さんがうつ状態となったり、ということが続きました。そのうちに自分自身も気分が落ち込んだり、不安感や緊張感が強くなり、不眠も強くなってきたため、精神科を受診し治療を受けました。３か月ほどでこれらの精神症状はある程度改善してきましたが、この頃から風邪をひきやすくなったそうです。汗をよくかき、汗によって冷えると風邪をひく。いったん風邪をひくとなかなかすっきりとは治らず、そのうちにまた風邪をひく、ということを繰り返しているので、１年中風邪をひいているような状態になってしまっている、

ということでした。また、風邪のときは下痢を伴うことが多く、そのうちに、疲れやすくなり、全身がだるくなり、風邪をひくと寝込んでしまうことが多くなりました。憂鬱感や無気力が強くなり、日常生活にも支障が出るようになったため、精神科の主治医に相談したところ、「そのような症状なら漢方治療が良いのではないか」と言われ、私の外来に紹介されていらっしゃいました。

初診時の診察では、まず疲れ果てたような、沈鬱でつらそうな表情だったことが印象に残っています。体格はやや小柄ですが、極端に痩せているということはありません。脈は沈んでいて弱く、舌には薄い白苔と歯痕を認めました。腹診では腹力はやや弱く、心下痞鞕や胸脇苦満はありませんが、腹直筋の緊張と腹部動悸を認めました。また、汗で冷えたためか下腹部の腹壁は冷たくなっていました。手足はやや冷たく、浮腫はありません。

さて、以上で患者さんのおおよその状態は判りましたが、漢方治療を行う上では、さらに詳しい問診が大きな手掛かりとなります。たとえば、下痢にもいろいろなタイプがあります。便の性状、回数、腹痛の有無などをうかがったところ、多くの場合は「急に腹痛がして、トイレに行くと下痢をする。お腹がゴロゴロ鳴ることが多く、ガスも良く出る」ということでした。汗は特に上半身や頭に多く、寝汗もかく。食欲はあるが、食べ過ぎると胃腸の調子が悪くなる、食後に眠気やだるさを感じる、ということもおっしゃっていました。睡眠については、寝付きが悪く、途中で目が覚めることも多い、ということでした。

これらの情報から、まずツムラ黄耆建中湯 18ｇを毎食前で処方しました。この処方を選択した理由はいくつかあります。まずこの方の場合は下痢ですが、便通異常があること、そしてその下痢は急な腹痛を伴うこと、汗が多く、寝汗もあること、などでした。

２週間後の受診時に、下痢をすることが減った、といわれました。６週間後には、熟睡感が得られるようになり、かなり楽になった。また、下痢はほとんどなくなりました。初診から４か月後には急な用事でヨーロッパ旅行に行かれましたが、自分でも驚くくらい元気に過ごせたそうです。その後、初診から約半年後には疲れやすさや全身のだるさもあまり感じなくなり、午前中から良く動けるようになってきました。体調が安定して、元気が出てきたので、「いろいろなことをやってみよう！」という意欲が出てきました。この頃には、こちらから拝見していても表情や話し方が力強く生き生きしてきたなあ、と感じられるようになりました。

もう少し後になって、この方がすっかりお元気に安定された頃のことですが、非常に印象的なエピソードがあります。いつものようにお話しているうちに患者さんがおっしゃいました。「先生、私ね、体調が悪かった時は周りの人たちから“ドタキャン女王”と言われていたんですよ。何か約束をしていても、いつも当日になると体調が悪くなってドタキャ

ンを繰り返していたものですから・・・私もすごく申し訳なくてつらかったし、周りの人たちもだんだん誘うのを遠慮するようになってしまって・・・それがおかげ様でいまではこんなに元気になって、“ドタキャン女王”の名もすっかり返上です」と、本当に嬉しそうに満面の笑顔で話してくださいました。（御存じだと思いますが、ドタキャンとは土壇場のキャンセルのことです）もちろん、それを聞いた私もとても嬉しくて幸せな気持ちになりました。医師になって良かった、漢方をやっていて良かった、としみじみ思うのは、このような患者さんの言葉を聞けた時です。

その後、この患者さんは安定した状態が続き、初診から約２年後に「自分の体調に自信がつきました」と言われて、治療終了となりました。

以上、これまでお話ししてきたことをまとめてみますと、この患者さんは、「すぐ風邪をひく」「下痢しやすい」という症状はもちろんのこと、不眠や抑うつ状態も黄耆建中湯の服用によって改善したケース、と言えると思います。「風邪をひきやすい」や「下痢しやすい」をいうような症状が漢方治療で改善したケースは、私の経験でも少なくありませんが、この患者さんはこれらの改善とともに精神症状が速やかに改善したことが大変印象的でした。いうまでもなく、漢方には「心身一如」の考え方があり、身体症状と精神症状は密接に関連しているため、一方が改善すればもう一方も改善するのは当たり前、ということもできますが、この例のように、もともとうつ傾向のある方が半年足らずで別人のようにお元気になられ、さらにその状態を維持しているケースは、私にはそれまではあまり経験がありませんでした。実は、最近は少しずつこのような患者さんが増えてきています。その度に「やはり漢方を勉強して良かった」と実感しております。

さて、次に黄耆建中湯という処方について、少しお話してみたいと思います。黄耆建中湯は『金匱要略』が原典とされています。条文は血痺虚労病篇に「虚労、裏急、諸の不足は黄耆建中湯之を主る」とあり、体力がなく疲労倦怠して腹直筋の緊張が強く、腹痛があり、気力、体力などが不足している場合に用いられる、と考えられます。生薬構成は小建中湯に黄耆を加えたものですから、基本的な適応は小建中湯と共通点が多いのですが、黄耆には体表の水毒を去る働きがあるため、黄耆建中湯は汗をかきやすい人や寝汗がある時に用いられることが多い、とされています。前にもお話ししましたが、この患者さんは「下痢をしやすい」などの胃腸の働きの衰えがあり、さらに「汗をよくかき、汗をかいた後に冷えると風邪をひいたり下痢をする」という訴えに注目して黄耆建中湯を選択しました。「冷えると下痢しやすい」という症状に良く用いられる処方としては他に真武湯、人参湯などもありますが、その鑑別の１つのポイントとして、私は「急に腹痛があり、下痢をする」ということが挙げられると思います。

漢方に特徴的な治療のアプローチの１つとして、「脾（あるいは脾胃）を補う」というこ

とがあります。「脾」は漢方では胃腸とその機能を指し、大地の恵みである食物を消化、吸収して自然から生命エネルギーを取り込む臓器として重要視しています。この働きが不足したり、衰えた状態を「脾虚」といい、具体的な症状としては、食欲がない、胃もたれ、胃痛などをおこしやすい、下痢しやすい、痩せている、顔色が悪い、疲れやすい、風邪をひきやすく、治りにくい、冷え性などがあります。このような症状を改善するような治療、すなわち「脾を補う治療」によって、胃腸症状の改善とともに、体力・免疫力が向上したり、アレルギー症状や冷え症などが改善したりすることは良く知られています。「脾を補う治療」に用いられる処方としては、六君子湯、四君子湯、人参湯、補中益気湯などの人参を含む処方、そして小建中湯、黄耆建中湯、当帰建中湯などの建中湯類といわれる処方が代表的です。

　臓器別ではなく、患者さんを一人の人間としてその心身を全体的に診て、歪みやバランスの崩れを整えていく、という漢方治療の特長のひとつである「脾胃を補う治療」。本日は、その代表的な処方のひとつである黄耆建中湯による「心身一如」を実感させられた治療例を御紹介させていただきました。